

続ボラッチョ・;ボニートのメキシコ便り(No.41)

「外面如菩薩、内面如夜叉？」

…へい！ タクシー、お願い！…

メキシコ市内には約13万台のタクシーが走っているという（2009年11月の新聞によるデータから）。法人、個人合わせて、約5万9500台（2008年3月末現在）という、東京都と比較した場合、その多さもわかるというものだろう。中でも多いのが、タクシーリブレと呼ばれている、個人の流しタクシーである。

以前は、多くが緑色のタクシー（メキシコでボチートの愛称で呼ばれていた、フォルクスワーゲンビートル型）で、公共交通の改善計画の一環として、08年からタクシー車にビートル型車の使用を終了する方針が出されているので、今は数が少なくなっているが、最盛期には



約5万台がこの形と言われ、これが街中のいたるところに走っていた。2ドアタイプが多く、助手席は取り外してあるので、其処から後ろの席へ、「よっこらっしょ！」と乗り込むのである。

メキシコでは経済的な市民の足となるのだろうが、外国人にはこのリブレは、時にはボツクリ、運転手による強盗（運転手に対する売上金強奪ではない）の被害の対象となるようで、過去にも何回か、日本人観光客



昨年まで数多く走っていたタクシーリブレ…
現在では色も変わり、しかも淘汰されつつあり、
今では記念すべき写真である

が被害にあった情報が流れてくることもあった。

これに対して、シティオというタクシーは市内の特定の場所に駐車していて、其処から直接目的地まで乗り込むか、電話で呼ぶもので、安全のためにこれを利用する人は多い。

ボラッチョ・ボニート氏も基本的には、これを利用しているが、もちろん、日本のように自動ドア付きなんて便利なものは無く、自分でドアを開け締めするわけである。

タクシーメータがついている車と、無い車があり、無い車に乗るときには、行き先を言って運賃は交渉により決めるのだが、この価格は相手との力関係で決定される。

どうしても運転手が客を乗せたいのなら、値段は少しは安くなるだろうが、客の方の乗る要望が強いときは、相手の方が勝ちであるが、一般的には相手の強い要望に納得させられてしまう。

このように事前交渉によって値段を決める方法は、慣れないと面倒であるが、時には良いこともある。例えば、利用しようとしたタクシーの運転手が、胡散臭さそうに見えたら、法外に安い値段を言って交渉決裂に持って行き、別の人の良さそうな運転手を見つければ良いのである。

わが老妻も最近では、ひとりでタクシーを使うことは無くなったが、かつてはこの手を使っていたようだ。乗ってしまったから、「あっ！失敗した、とんでもないのに乗ってしまった」と、不愉快な思いをするよりずっと人間味のある方法である。



「バスとタクシーとではどちらが安いと思う?」、「そりゃ、バスだろう」「いや違う。タクシーさ」、「どうして?」「バスに乗るとすぐ料金を払わなければならないが、タクシーは降りる時に払えばいい。それまでの時間にお金の価値が減るので、タクシー代の方が得なのさ」

物価上昇の激しい国では、上のようなチステ(小哘)の一つも考えられようが、当地では物価は徐々に上がっているものの、小哘になるほどではない。それでもタクシー業界の実体は、苦しいようである。

今年2月の報道によると、タクシードライバーの一日あたりの稼ぎ高は多くても、300ペソ(3000円強)ぐらいで、多くは100から300ペソぐらいで、かつ長時間労働だという。街を走っているタクシーの乗車状況を見る限り、結構利用客が多いと思えるが、多くの乗客が短い距離でも歩かずに、利用してしまうのだろう。

前に、「安全のために」と書いたが、強盗とか、かっぱらいの類ではないものの、今まで経験した中には不埒な者もおる。当方が利用するタクシーの実体からすれば、値段交渉でも一般的には相場よりも、多分多く支払われているうえ、例えば、メーターの表示料金とは異なる料金を請求され、文句を言ったところ、少しはまけてくれたが、そのメーター料金以上の額を支払わされた。

あるいは、メーターを倒さずに、走ったので抗議したところ、いけしゃあしゃあと、「メーターは故障しているから」と堂々とのたまった挙句、そのまま通常より高い料金を、請求されたなどである。外国人と見て、そのよう



な行為に及ぶのか、普段からそれを常習にしているかは分からない。

しかし、このような悪い例ばかりではない。先日はこんな経験をした。心地よい音楽を流していたので、そのことを褒めたところ、降り際にその音楽のCDを呉れたのだ。もちろんコピー版であるが。

一般には、一種の密室状態の中で、挨拶も無く、行き先を聞くでもない運転手の無言状態が多い、メキシコでも日本でも似たような現状の中で、短時間でアミーゴ(友達)状態になった極めて稀有な状況だといえよう。

当地はカソリック教徒が多い国ゆえ、タクシーの運転席のバックミラーには、十字架のロザリオを下げているのが目に付く。そこで上の諸例とあわせて、以下の諺が思い浮かぶ。

「**Detrás de la cruz está el diablo**」(デトラス デラ クルス エスタ エル ディアブロ と発音し、直訳は、十字架の陰に悪魔ありであるが、日本語の諺では、能ある鷹は爪を隠すと約してある本があるが、これだと肯定的な感じがするが、原語のほうは否定的な感じがして、少しニュアンスが違うと思う。

ボラッチョ氏としては、外面に惑わされるなという風に意識し、タイトルはこの意図を採用した。しかし、一般にはタイトルに込めたように、外観で見分けるのは難しい。良い運転手に当たれば良いのだがといつも思っているが、これからは、例え不満な例に当たっても、安全を買ったと思って我慢しようし、稼ぐ為に必死に頑張っていることだろうと、少しのことには目くじらを立てないことにしよう。

使用する時間帯、現在地点、行き先、安全性、経済性、持っている持ち物などの多元項目を瞬時に頭の中で整理し、タクシーを含めて使用する交通機関を決めるのであるが、条件に適った目的が達成されたときは、心が浮き浮きし、老妻の注意を右から左へ聞き流して、いつもよりテキーラの杯を多く重ねるのであった。

(2010年6月14日、今週は北部地域まで足を伸ばしての、大学研究所で3日間の、講義活動に入ります)